

子供はばかでなかった

小川未明

青空文庫

吉雄は、学校の成績がよかつたなら、親たちは、どんなに
しても、中学校へ入れてやろうと思つていましたが、それは、
あきらめなければなりませんでした。

「なにも、学校へいったら、みんなが偉くなるというのでない。
りっぱな商人には、小僧から成り上がるものが多いのだよ。
家には、なんのためにもならぬから、いいところをさがして、
奉公なさい。そして、お友だちに、まけないようにしなければ
ならぬ。」と、お母さんは、いいました。

いままで、小学校時代に、仲よく遊んだ友だちが、それぞ
れ上の学校へゆくを見ると、うらやましく、お母さんには思

われました。

「なぜ、うちの子は、もうすこし勉強強をして、できてくれぬだろう？」

こう思う一方には、また、できない我が子が不憫になって、

「あの子の心のうちこそ、いつそう、悲しいだろう。」と、考え、なにもいうことはできなかつたのです。

町の、大きな呉服屋で、小僧が入り用だということを知ったので、そこへ、吉雄をやることにしました。

「よく、ご主人のいいつけを守つて、辛棒するのだよ。」と、お母さんは、いざゆくというときに、涙をふいて、いいきかせました。

子供が、いつてから、二、三日というものは、お母さんは、仕事も手につきませんでした。

「いまごろは、どうしているだろう？」と、思ったのでした。

すると、五、六日めに、ひよっこり、吉雄はもどってきました。

「どうして、おまえ帰ってきたのだい。」と、驚いて、お母さんは、たずねました。

「上の小僧さんが、意地悪をしていられない。」と、吉雄は、訴えました。

「そんなことで、帰ってくるばかがあるか？」と、お父さんは、しかりましたが、お母さんは、そこばかりが、奉公口でないといつて、ほかをさがすことにしました。

これも、町で、きれいな店を張っている時計屋でありました。

そこで、もう一人、小僧がほしそうだから、世話をしましようにと
いつてくれた人がありました。

「ほんとうに、時計屋なんかも、いい商売だね。」と、お母
さんは、喜びました。

吉雄は、その人につれられて、時計屋へゆくことになりました。
「またつとまらんといつて、帰ってくるようなことがあつては、
近所に対して、みつともないから、たいていのことは、我慢を
するのだよ。」と、お母さんはいいきかせました。

吉雄は、うなずいて、出ていきました。やはり、二、三日は、
お母さんは、子供のことを案じて、仕事を手につきませんでした。

「つらくても、我慢がまんをしているのでないかしらん？ あんなことをいうのではなかった……。」と、思おもいわずらつていますと、
 「僕ぼく、帰かえつてきた……。」と、入いり口ぐちでした声こゑは、たしかに、自じ分ぶんの子この声こゑでありました。母はは親おやは、またかおどろと驚おどろいて、飛とび出だしました。

「どうしたんだ？ 吉雄……。」と、お母かあさんは、思おもわず、我わが子この顔かおをにらみました。

よくきくと、時計屋とけいやのおばあさんは、病びよう気きで臥ねているのでした。吉雄よしおは、その看かん病びようのてつだいをさせられるのがいやさに、出でてきたというのであります。

「もう、お年としより臥ねていられるのだから、そんなこと、なんで

もないじやないか。」と、お母かあさんは、ひたすら、吉雄よしおが、勤つとめ
のいやさから出でてきたと信しんじて、しかりました。

「僕ぼくは、たんつぼのそうじなんか、させられるのはいやだ！」と、
吉雄よしおが、いいますと、お父とうさんは、これを聞きいて、

「子供こどもに、そんなことをさせるのは、先せん方ほうがよくない。いやが
るのは、もつともだ。」と、こんどは、お父とうさんが、吉雄よしおに味方みかた
されたのでした。

吉雄よしおは、家いえに帰かえると、いつも川かわのほとりにゆきました。川かわは、
村むらはずれの丘おかのふもとを流ながれていました。草くさの上うえに足あしを投げ出だし
て、あちらの空そらをながめるのが大好きだいすでした。彼かれはかつて、ここ
の景色けしきを絵えに描かいて、学がっこう校こうで先せん生せいにほめられ、その絵えは、張は

り出しになりました。また、ここを文章で書いて、甲をもらいました。

その日も、ここへやってくると、川の水はゆるく流れて、空をゆく、白い雲の影を、ゆったりとした水面にうつしていました。「釣りにくれば、よかつたな。」と、思っていますと、丘の上で、ちようど自分ぐらいの少年がくわをふり上げて、土を耕し、なにか植えていました。

「僕も、町へなんかゆかず、ああして働いたら、どんなにいいだろう……。」と、思っていると、その少年がうらやまれたのであります。彼は、少年のそばへゆきました。そして、二人は、じきに仲好しになってしまいました。

その少年しょうねんは、りんごの木きを植うえていたのです。体が弱よわいの
 小学校しょうがっこうを卒おえると、自分じぶんは果樹園かじゆえんを営いとなむことにしたので
 す。それで、自分一人じぶんひとりではさびしいから、

「君きみもお父さんとうや、お母さんかあが許ゆるされたら、ここへこないか。二
 人たりでいろいろなものものを栽さいばい培ばいして、愉快ゆかいに生活せいかつしようよ。」と、
 少年しょうねんはいったのでした。

「僕ぼくは、きつと許ゆるしてもらおうよ。」
 吉雄よしおは少年しょうねんと誓ちかいました。そして家いえに帰かえって、熱心ねっしんに頼たの
 んで、許ゆるしてもらったのです。

いま、この村むらで二人ふたりの少年しょうねんが、経営けいえいしている果樹園かじゆえんを
 知らぬものはありません。春はるのうらかな日ひに、ここを訪たずねると、

かわ
川べりには、紫むらさきほしの星ほしのようなヒヤシンスが、一面めんにいい香りかおを放はな
つています。また、真まつ赤かなチューリップが、金きんいろ色いろに日ひの光ひかりに
かがやいています。

そのほか、いちごの畑はたけがあり、夏なつにかけて、丘おかのスロープには、
大おおつぶ粒つぶなぶどうのふさが、みごとに実みのるのでした。

ふたり
二人ふたりの少年しょうねん園えん芸げい家いかの、うわさが世間せけんに広ひろまるたびに、吉雄よしお
のお母かあさんは、喜よろこんで鼻はなを高くたかしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年3月1日

※表題は底本では、「子供《こども》はばかでなかった」となっています。

※初出時の表題は「子供は馬鹿でなかった」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供はばかでなかった

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>